

【第十三回】ミステリーズ新人賞最終候補作】

植崎優士 「魔女の棲む家」 …………… 2

【少年と美女の邂逅】

果野 「メルティ・シンデレラ」 …………… 26

【本格警察ミステリ】

観覧車 「死を穿つ愛」 …………… 38

【善人と悪人のデスゲーム】

アホ伝説 「ライフ・ダービー」 …………… 63

【呪われた村での惨劇】

ごめす 「禍夜葬」 …………… 76

【狡猾な蛇が囁く誘惑】

ゆず 「蛇の甘言」 …………… 96

あとがき …………… 100

魔女の棲む家

まじよ す いえ
うえさき ゆ と
植崎優士

日暮れの街は静かに夜を待つている。通りへ向かつて軒を連ねる商店の窓からは温かみのある灯が漏れて、暮れの薄闇に滲んでいた。

宿の軒下では娼婦が淫靡な笑みで客を呼び込んでいる。煤や泥で汚れた作業着姿の男たちは連なつて酒場へと歩いていく。路地裏からは糞尿の悪臭が漂い、浮浪者の姿は人気のない通りに集中していた。ファイルンツェから離れた辺境の街でも人の営みの姿は変わらないようだ。

十五世紀も半ばに入り地中海諸国が貿易に大成功を収めても旅人を襲う盗賊の話は絶えなかった。日の当たらない場所には人としての生活を営めない者たちがたむろしている。富の栄光は確実に地中海を照らしていたが、同時に街角の貧困はその影を増しているように思える。

私はその場をやり過こし問題の場所へ向かった。日は落ちようとして、いるが彼なら現場にいるだろうと思つたからだ。

都市と呼べるほど発展していない地方の街。商館フオンダコを構えた東の入り口から西へ広がつた街の、最奥の地区にあるささやかな広場を正面に構えた形で目的の屋敷はあつた。つろりと金属質な輝きを放つ鉄柵の門扉が私を出迎え、それは植物のつるを見立てた飾りで満ちていた。甲高い音を発して門扉は開き、石壁に囲まれた広大な土地、天高く屹立する塔楼を持つた頑丈なレンガ家が姿を見せる。初めて訪れる者でも察しの付

く富の象徴で満ちていた。

屋敷へ入つて右にある簡素な木製の扉を開けると、山と積まれた大袋や木箱がまず目に飛び込んだ。わきには胸当てに羽飾りのついた兵士が控えていた。相棒の——あまりそう呼びたくはないが——マルコ・ヴィヴァルディはその隣に立ち、薄く開いた瞳で室内を子細に観察している。顔はこちらを見ないまま、兵士が衛兵隊の長を務めるアルベルトという男であるのを説明された。

「公証人のジョバンニ、よろしく」

彼が差し出してきた大きな手を握り返し、私は自己紹介をした。

「また依頼するとはな」

簡単な挨拶を済ませてマルコに向き直り吐き捨てるように言うと、彼は無表情のままにこちらへ視線を向けた。

「捜査は公証人をつけることが条件にされている」

マルコは当たり前のように言うが、心身ともに疲れ切っている私は思はず溜息を吐いてしまう。

「私を呼ぶ理由にはなっていない。公証人は他にいるだろう」

なぜかわからないが、この男は私を気に入っているらしい。

マルコはメデイチ家が直属で抱える唯一の公的自治捜査官である。治安統制は原則、地方の政治によつて決められた方針で運営され、街単位で傭兵を雇つて警備を行わせる。その中でマルコはただ一人、メデイチ家の影響が及ぶ管轄内において発生した事件の『再捜査行為』が許されていた。衛兵によつて捜査の終了した事件へ介入できる無二の権利者

3 「魔女の棲む家」

である。この男の仕事——なんとも形容しがたい職業は、そのために記録が必要なのである。

この男の来歴は明確ではない。私は公証人という仕事柄、役人との付き合いもそう少くはないのだが、誰に聞いてもマルコの情報は本人が語る範囲——つまり名前と四十という年齢以外はわからなかった。かつては学者を志していたとか、錬金術師であるとか、本人のほめかす内容や曖昧模糊とした噂話はあまり釈然としなかった。メデイチ家がマルコを支援し、自治活動の役人のような待遇で置いていることも不明だ。

「ジョバンニも見たまえ」
私の問いには答えないでマルコは室内へ注意を促した。何度目かの仕事に私は慣れ始めていたので、彼の言わんとすることはわかる。私は素早く現場の観察を済ませた。

物が多いわりにはきちんと整理されている。壁際には人間の背丈まで木箱が積み重ねられており、隙間から辛うじて覗ける窓はただの灯り取りのようだ。

そして埃でむせ返りそうな部屋の真ん中には薄く血痕が認められた。事件から短くない時間が経っているはずであるが、荷物の多さゆえに洗い流すことは簡単ではなかったのだろう。その血だまりは一か所に広がっているわけではなく、大きく歪な円形がそこかしこに点在する奇妙な痕跡だった。

「この倉庫で屋敷の主人、ブルーノ・バルトリが首を切断された状態で見つかったのだな」

私が室内に一通り視線を巡らせると彼はいたずらっぽく私の耳元で囁いた。

「おどましい。悪魔の所業だ。……彼の者に安らかな眠りを」

私は小さく十字を切った。事件のことは頭に入っていたが実際に現場を見てその痕跡を感じると気分が悪くなる。果たして首を切断された男に救いは与えられるのだろうか。

「久しぶりに興味深い問題だと思っね」

マルコは構わず大きく両手を広げて嬉しそうに言った。彼にとつて事件は知的好奇心の種でしかないらしい。それが結果的に治安維持に貢献していようと、彼は被害者や遺族を気に掛けることなど頭の中には無いようだ。

「お前という男は本当に不謹慎な奴だよ。……それで今回の中心の問題とはそのことか」

殺人のような重大事件は地方自治が原則であっても中央に記録の報告が義務付けられていた。マルコはその記録を読み事件への介入を決めている。仕事をするときは常にそうだった。彼が事件の解決に納得できなければ馬を駆り、現場へ出向いて再捜査を告げる。そこへ私も同行し——もちろん彼と同様に記録を読まれたあとに——再捜査の記録を作成する。以前までこのような仕事はなかったと思うから、事件記録を作成し中央へ送る制度自体がマルコの仕事のために作られたのではないかと疑っている。

マルコが仕事を請け負うときは必ず衛兵では対処できない不可解な問

題がある場合に限る。それを彼は中心的問題と呼んでいた。不可解な謎がある場合は往々にして重大な秘密が隠されているものらしい。犯人は殺人の痕跡だけでなく周囲にはわからない秘密を隠すために何らかの工作を行う。それが結果的に不可解な事象を観測者に与える。だから不可解の解明には丁寧な現場を観察することが大切らしいのだ。

「噂には聞いていたが、再捜査を受けたのは初めてだ。いったい何をしようと言うのだね」

浅黒く焼けた肌。彫りが深く力強い顔をした屈強な兵士アルベルトは、しかし傭兵には珍しく理知的で冷静な瞳をしていた。彼らが仕切る自治の仕事へ疑いを向ける意味となる再捜査行為のためか、それでもやはりアルベルトの眉間には陰のある皺があつた。マルコが介入して喜ぶ衛兵はいない。ある者は恐れ、怒り、困惑する。再捜査専門の捜査官たる宿命だろうが、私はそれに同情するつもりはない。その奇妙な仕事は他人の気持ちを酌むような配慮を必要としない上に、彼自身そのようなことを気にする人間ではないのだ。

「捜査記録には目を通したが、生の声として事件の顛末を聞かせてもらう」

マルコの声には有無を言わせぬ力が込められていた。アルベルトは傲慢な態度にも憤ることなく静かに話し始めた。

「二か月前のことだ。昼前に荷卸しのため、幹部社員フアントーレの一人が屋敷の倉庫へやってきた」

アルベルトの声は無風の中にある湖のように穏やかで、そして慎重だ

った。事実を正しく伝えようとする几帳面さが表れていると思えた。私は背負い袋から筆記道具を取り出して、アルベルトの紡ぐ言葉を綴った。「扉は閉じられていたが、普段施錠されているはずの南京錠は外されていた。不思議に思つて開けて入つてみると室内は凄惨な状態だった。幹部社員は驚いて会社へ戻りヤコポに伝えた。それから我々へ知らせに来て、共に現場へ駆け付けた。倉庫にはすでにヤコポがいた。報告を受けてすぐに帰つてきたらしい。彼による承認のもとで現場にあつた遺体をブルーノだと確認した」

「ヤコポとは被害者の叔父で間違いないな」

「そうだ。この家には若主人のブルーノ、叔父のヤコポとその若き妻シルヴィア、二人の幼い息子フェデリコが住んでいた。あとは使用人の家事婦と奴隷の少年が一人だけだ」

「組合長の家族にはずいぶんと小さい家系だが」

マルコは矢継ぎ早に訊ねた。最初から質問内容を決めていたかのよう
に、一つの問いで考え込んだりはしない。よつて会話の速さはすさまじく、記録する身としては憎らしいことこの上ない。

「もう一人、ヤコポの弟であるガスバロがいる。しかし彼は外国に住んでいる。武具商としてではなく、より利益の見込める香辛料や海外の裝飾芸術品の商売をしているらしい。事件後すぐに現地統治者へ親書を飛ばして確認しているが、ガスバロが現地を離れたことはないだろうな。事件前後の期間にも従業員や客が彼の姿を現地で目撃しているようだ。また先代の主人、つまりブルーノの両親はずでに亡くなつていて。両親

は五年前にブルーノが二十のとき黒死病で死んだ」

「そして両親の死後はブルーノが会社と家を相続した。今となってはヤコボが引き継いでいるのだろうか」

マルコは深く頷きながら言う腕を組んだ。

「ところで現場の倉庫の鍵は普段どこへ保管していたのだろうか」

「鍵は二つあったらしい。一本は商館で厳重に保管してあったそう、社員はそこから持ち出しこの現場で荷卸しをするつもりだった。もう一つの鍵はこの家にあるヤコボの書斎で保管してあったようだ。事件後確認してみたが彼曰くいつも通りの位置にあった」

淀みなくアルベルトとマルコの会話は進んでいた。息の合ったやり取りに見え、マルコについていけるアルベルトの知性にも感心する。さすがに傭兵隊を指揮し運営するだけの男だ。肉体の頑丈さだけでなく機転の利く頭脳も必要なのだろう。

「事件発覚の経緯は大体わかった。しかし第一発見者である幹部社員のエンツォは事件後すぐに行方不明になっているらしいが、その点についてはどうなっている。本人が不在で、当時の動きはどのように知ることができたのか」

そこは私も奇妙に感じていた。事件のあと、調査を行う過程でいつの間にかエンツォは行方不明になっていたと言うのだ。彼が消えてしまったのに、彼自身の動きはどのように把握されたのだろうか。

「社員が遺体を発見した後、ヤコボはその報告を受けた。だから社員の動きはヤコボの供述によって組み立てられている。もちろん、社員が我々

へ報告に訪れた際は簡単な話を聞いているが、ほとんどはヤコボの証言だな。肝心の本人はまだ発見されていない」

アルベルトは淡々と話す。事実をわかっている範囲で正確に話しているようで、低い声に彼の慎重な性格が表れていると思った。

「遺体の状態に不審な点はなかったか。首に関する点、それ以外の点でも」

「首は斧で何回も試したようで、叩き潰されたみたいになっていた。現場は武器組合の頭領をやっている家の倉庫だから、鎧ごと砕く、二ついやもあって、もう回収したが死体の横に放り捨ててあった。体には目立つた痕跡はなかったから頭をやられたのだろうか、首を絞めて殺されたのか、斧で勝ち割られたのかは判然としないな。しかし現場はおびただしい量の血にまみれていて、むせかえるようなきついにおいが充満していた。遺体の確認を先にしていたヤコボなんかは、私たちが到着したときには服に大量の血痕をつけていていやそうな顔をしていた。当然我々も調べる際は遺体に触れなくてはならないから、そこら中が血まみれだった」

凄惨な光景を思い出したのか、アルベルトの顔は青白くなっているように思えた。戦争に向向くことのある傭兵でも、殺人事件、しかも猟奇的な事件の気味悪さには辟易してしまうのだろう。私たちは直接遺体を見ることが滅多にないため、その点は同情とともに安堵してしまう。

しかしこの現場が血の海であった様は、いまだ残る大量の血痕から想像できてしまう。私がマルコにそれを言うと、しかし彼は無視して取り

調べを続けた。

「最後に現場から首が消えたことについて、説明を願う」

マルコがその話題を出すと、アルベルトは困惑の表情を浮かべながらも口を開いた。初期の記録確認では私の出る幕はない。そもそも私は記録係として呼ばれているため、ただひたすらに書き漏れをしないよう気を付けるだけだ。だからと言って露骨に無視をされるのは気分がよくないのだが。

「奴隷が言うには二時間ほどかけてこの倉庫の付近を、つまり廊下や玄関周辺を掃除していたらしい。入り口近くの廊下は従業員の出入りで汚れやすい上に客人が入る場所でもある。念入りに掃除をしていたらしいが、その間に部屋を出入りする人間を全部見ていたと言っ」

「つまり奴隷は犯人も見えていたことになるな」

「しかし奴が仕事をしている間に、生首を抱えた人間が出ていくところは見えないと言っている。もちろん、当時の倉庫もこの通り多くの荷物があったが、一つ一つ開けて首がないかを我々衛兵隊が確認した」

アルベルトはいよいよ不思議そうに、そして少し気味悪そうに目を伏せた。

「犯人が直接首を持たずに、何か袋や箱に詰めて持ち運びをした可能性は考えられないのか」

「それもない。誰も出入りの際に首を持ち出せるような木箱や麻袋を手にはおらず、全員手ぶらだったと言っていた」

全員手ぶらだった。その声は陰気に沈み、信じられないことを語る恐

怖が滲んでいた。

「衛兵隊ではどのような見立てで捜査をしたんだ」

アルベルトは腕を組み難しそうに目を閉じた。眉間には皺が寄って唸り声が漏れる。

「通常なら現場の捜査をし、不審な物品を見つければ関係者に追及する。そうでなければ、状況を聞きこんで怪しい者を追及する。あなたなら知っているだろうが基本的に事件捜査は自白が証拠だ。ところが今回の事件では特徴的な証拠はなく奴隷の証言が重要となった。しかしその結果は非常に奇妙なものとなった。つまり――」

「奴隷の証言は信憑性がないと判断された。その他の整合性から社員が発見を装ってブルーノを殺害し、ヤコポへ報告した後に衛兵隊の詰め所へ向いてから騒動の合間に逃走したと見られ、現在も捜索中である」

マルコはアルベルトの言葉に次いで、馴染み深い物語を暗唱するような口調で述べた。事前にフィレンツェで記録を読み込んでいるから、私たちは事件の基本的な流れは理解している。

「奴隷の目撃者に話を聞いてみよう。それから全員の話を聞く」

不可解の原因をつかむため、マルコは早々に倉庫を出て行った。捜査の緊張と不躰な彼の態度から解放されたアルベルトは溜息を吐き、私へと視線を転じた。彼の負担に同情しつつも、ご苦労とだけ声をかけて私もマルコに続いて部屋を出た。

メルティ・シンデレラ

はての
果野

いつも使っているのとは違う道を通ると、脳にいらしいとか。

そんな話を思い出しながら、米田俊は自転車走らせていた。駅前の時計にちらりと目を走らせる。もうすぐ午後五時。普段ならまだ学校でバスケットボール部の練習がある時間だ。中学時代からバスケット部活に打ち込んできたシンンは、こんな時間に学校外にすることがなにか新鮮だった。

シンンの住む街は電車の線路で北区と南区に分断されている。南区側の駅の周りは、商業施設が立ち並ぶ街のメインストリートがあり、いつもにぎわっていた。シンンの通う高校はメインストリートの先にある、立地やアクセスの良さで人気だった。

普段の帰りに寄り道するならメインストリート沿いの店だが、今日は学校側の都合で体育館が遅くまで使えず、早々と解散となったために時間がたつぷりある。最近北区にオープンした大型スポーツショップに向かおうと、シンンはひとり自転車を走らせているのだった。

踏切を越え左折し、北区の線路沿いの道をしばらく進むが、なかなか目的地のショップがあらわれない。見知らぬ公園の前まで来たところまで、シンンは不安になった。

「あれ、右折だったか？」

シンンの家は南区、通う高校も南区、さらに買い物も南区で済んでしまふ。シンンにとって北区は、よほどの用事がない限り一人で向かわない、未開の土地だった。図書館や美術館などがあるのは北区なのだが、バスケット部のシンンにとって、それらは退屈で縁がないものだった。

公園の前で自転車を止めて、背負ったスクールバッグからスマホを取り出す。スリープを解除しつつ指紋認証センサに触れてロックを解除し、地図アプリを起動する。検索ボックスをタップして、店の名前を入力する。

その時、公園の時計から午後五時を告げる音楽が鳴り始めた。ゆうやけこやけだ。何とはなしに、音の出ている方向を見る。

公園には街灯が奥と手前の二本しかなく、薄暗くてひと気がなかった。そのせいか、手前の街灯のそばにぼんとひとつ置かれたベンチがやけに目立って見えた。そのベンチには、一人の女性が座っていた。

シンンの目は自然とその女性に吸い寄せられ、よく見ようと目を凝らす。

二十代後半だろうか、ブラウスにジャケット、シンプルなパンツルックにパンプスという装いに、ちいさめのバッグを肩にかけていた。うつむいて肩までの髪が前に流れ、顔がよく見えない。女性がつい、と手を挙げて髪をかき上げる。あらわになったその顔を見た瞬間、シンンは息をすることを忘れて目が離せなくなってしまった。

暗めの色の髪に縁どられたかんはせは透き通りそう、街灯のぼんやりとした明かりを受けてしろう光っていた。うすくルージュのひかれた

くちびるをぎゅつと結び、かなしげに伏せられた瞳はしつとりと濡れ、まつ毛からしずくがひと粒ぼろりと零れ落ちるのが見えた。きらりと光ったしずくは、服の上で固く握りしめられている手の甲にあたり、はじけて消えた。

(きれいな人は、涙もきれいなんだ)

手に持っていたスマホが滑り落ち、カシヤンと音をたてて転がった。その音が届いたのか、それとも視線に気づいたのか、女性がシュンを見た。黒目がちの瞳と真正面から向き合う形になり、シュンはかあつと耳まで血がのぼるのを感じた。ふらりと足元がおぼつかなくなる。

(試合の前でさえこんな気持ちになつたことない)

どこまでも続く深い穴に落ち続けているような、永遠にその瞬間が引き伸ばされているような感覚がシュンを襲う。しかし、女性の瞳からもうひとつ涙が落ちたのを見て、我に返った。

(あの人の涙をどうにかしないと)

シュンは自転車を公園の入り口に止め、先ほど落としたスマホを拾い上げる。なにか、拭くものを。そう考えたシュンはわたわたと服のポケットを探る。ちらりと彼女の方を見ると、彼女もまたぼんやりとこちらを見ている。

(うっ。俺、ちようダセえ)

ズボンの左ポケットに、毎朝母親から押し付けられるハンカチがくしやくしやくに丸まって入っていた。少し顔を近づけてにおいをかいでみる。臭くない。あの美しい人には不似合いだが、ないよりマシだと形をすこ

し整える。そして、シュンは彼女のもとへ近づいた。

「あの、これ。どうぞ」

スマートにハンカチも差し出せない自分が恥ずかしくて、まともに彼女の顔も見ることができない。シュンは、ぶつきらぼうな口調でハンカチを彼女の目の前にぐいと差し出した。ハンカチを差し出すまでのもたもたした挙動すべてを見ていた彼女は、あきれているのではないか。ハンカチを受け取ってくれるか急に不安になり、差し出した手を引つ込めたい衝動に駆られる。すると、手の先になにかひやつとしたものが触れた。

「ありがとう」

かわいらしい声にどきつとして彼女の方をきちんと見る。かすかにほほえんでシュンを見上げた彼女が、シュンの手からハンカチを受け取るところだった。彼女の手がハンカチを持って離れると、ひやりとした感触も一緒に去った。

彼女がハンカチを当てるようにして目もとをぬぐう。さっきまでくしやくしやくだったハンカチが急に高級なものに見えてくる。彼女が少し赤くなった目をぼちぼちとしばたかせる。

「ハンカチは返さなくて大丈夫です。……それじゃ」

彼女を見つめているのがいたたまれなくなり、シュンはその場で小さく会釈すると、足早に自転車のもとへ戻る。後ろで彼女がなにか言ったようだが、振り返らず自転車でまたがると、一目散に逃げ出した。

死しを穿うがつ愛あい

かんらんしゃ
観覧車

一章

彼女と共に眺めた夏夜に煌めく星を私は忘れることができない。

それは昼夜問わず響き続ける蟬の聲が一層騒がしい夏の日だった。私は仕事を終え彼女がいる病院を訪れた。面会時間はとうに過ぎているが担当医のはからいで特別に許しをもらい、彼女と共に星がきれいに見える山へと車を走らせた。助手席に座る彼女を見つめる。肩の長さで揃えた黒い髪、きめ細やかな肌に意思が強そうな瞳——そんな彼女が重い病に冒され死へと踏み入れつつも、なお輝き続ける彼女の姿を間近で見ても不敬ではあるが、美しいと私は感じた。

私が愛を捧げ続ける彼女は——たとえどのような闇の中においてもその光を放ち続ける。そしてその軌跡が私の生きる道しるべとなるのだ。だから私は……。

「ちゃんと前見てくださいよ」

彼女は微笑んだ。

山の入口までたどり着くと私と彼女は車を降りた。私は懐中電灯で夜道を照らし、彼女は花束を持ちながら山道をゆつくりと登っていく。やがてあたりが開け私たち二人は町が一望できる崖の前に出た。崖の傍に

は一基の——土や石でできた簡易的な——墓と、小さな木造の小屋がある。彼女はそつと墓の前に花束をおろし、手を合わせた。やがて顔を上げ呟いた。

「星、きれいですね」

私はしばらく彼女を眺めたあと、視線を空へと向けた。きらきらと輝く星、月が放つ優雅な光が私にもたらされる——暖かい光だった。

「三人で一緒に星が見れて良かったです。好きな人と、守りたかった人と一緒に」

私は頷いた。

東京都文京区に立つ瑞音神社に向かい合う形で笹木警察署が見える。全体をレンガ調でしつらえた二階建ての建物の屋上には、国家組織の象徴である国旗が掲揚されている。署の一階には市民の相談や苦情対応を目的とした警務課がある。しかし、時刻として午後の五時を回っても訪れた人物は二人だけという——大変平和なことではあるが——閑散ぶりだ。

対照的に二階の生活安全課や交通課、そして清水一樹刑事が属する刑事課に及ぶ多くの署員たちは忙しなく動き回っていた。一時間後に行われる警視庁捜査一課と足立区西川警察署、そして本署との合同捜査に向けた会場設営のためである。

設営は二つの班に分けられた。署の中で一番収容人数のある会議室を

使用しても一課の刑事と合わせて五十人を越える捜査人員のために不足した席を、机や椅子の配置で工夫する構図班。お茶出しや捜査本部の戒名を書くなど、あらゆる備品を用意する整備班である。

清水は後者で捜査会議に取り扱われる事件『足立区兼文京区内殺人事件』に関する調査や検死結果をパソコンで要約し書類化する係に配属され、情報管理課の課長である黒木和人警部のもとで書類作りにも励んでいた。

「清水、終わったか？」

「ちよつと待つてください——はい、終わりました！」

キーボードをかちかちと人差し指で押していた動きを止め、清水は顔を上げた。その動作にすこし遅れるようにして黒木が立ち上がり、清水のパソコン画面を見つめた。三代前半のはずだが無秩序にそろえた髪に、無精ひげを生やした口元、無造作に着ている警官服のためどうして年老いて見える。

黒木は少し頷き言った。

「まあいいだろう。後は俺が適当に印刷しておくからお前は机移動の係に移ってくれ」

「はい！」

「やけに元気だな、清水」

気怠そうな黒木の質問に清水は明朗な頷きを返した。

「こちらに赴任してきて初めての大きな事件ですからね」

黒木とは正反対に警官服をきちんと着込み髪を整髪料で固めた清水は、

地元である埼玉の交番勤務にて勲章を受け東京内での所轄へ異動となった。現在箕木警察署に勤務し、刑事になってから五ヶ月目になる。

「しかし、一つ疑問が。なぜうちに捜査本部が立てられることになったのでしょうか？ 捜査一課が関わるような殺人事件は管轄内にはなかったと記憶していませんが」

警視庁捜査一課が所轄署に捜査本部を置く場合、そこには合理的な理由がある。それは指示系統の効率のためだ。

地方などで起きた凶悪事件を東京にいる捜査一課が指令を出すのでは効率が悪く捜査に支障をきたす場合もあり、それは東京都内であっても同じだ。だからその事件が起きた地域の所轄に捜査本部を置き事件を調査するわけなのだが。

「調査を見る限り今回の事件の被害者はここ文京区に住んでいるようです。ですが、事件現場は足立区にある工場ですよ？ 管轄違いではないでしょうか？」

「事件現場は移動した可能性があるという見解らしいよ……」

清水の疑問に溜息をつきながら答えたのは、沈んだ顔で署内をとぼとぼ歩き回っている箕木警察署の署長である吉本だった。

「被害者は別の現場で殺されたということですか？」

「その可能性もあるってことだよ……。死因は青酸カリだからね。被害者を殺害したあと、工場に運んだってことも考えられるし」

「なるほど！ 区内で青酸カリを飲まされた可能性もありうるわけですか！」

「そう言うことだよ……」

俯いて今にも倒れそうな署長とは対立的に目を輝かせる清水。両者を
見比べながら黒木は問いを投げかけた。

「署長、そんなに捜査本部が立つのが嫌なんですか？」

黒木の疑問に清水も賛同する。

「いいじゃないですか！ 一課との合同捜査ですよ！」

「いいわけないよ……。捜査本部が立てられるってことはね、捜査一課
の刑事たちの「機嫌取りをしないといけない」ってことなの。そんなの気
が重くて……」

署長はさらに顔を沈め、これから身に降りかかる事態に恐怖している
ようであった。清水はふと署長の考えに思い至る。

捜査本部が所轄に置かれ捜査一課との合同捜査になる場合、一番苦勞
する立場は所轄の課長クラスの警察官である。一課の刑事と所轄の刑事
たちが集まり捜査を行うのでその中で軋轢が生まれることもあり、両者
の関係を円滑に保つ調整役として振舞うことが署長の合同捜査による仕
事と言っても差し支えない。

「でも一課の刑事ばかり気を遣っていたら、署内や他の区内の刑事たち
に反発を買いやし。ほんとうに気が重いよ……」

瘦身ながらも五十代前半にしてみごとに薄くなった頭部に汗をたらし
署長はあたりをうろつき回って落ち着きがなかった。

「考えたって仕方ないですよ、署長。とにかく合同捜査頑張ってください
い。俺は課に戻って茶でも汲んでくるんで」

「残念だったね。今回の捜査ではお前にも参加してもらわず『名刑事』
殿。警視からのご指名だ。ちよūdい、相棒として清水と組んでもら
おう」

一瞬の沈黙。思わぬ反撃に合い瞬きを忘れていた黒木や突然の相棒通
知に驚く清水、緊張が少しだけほぐれた署長を残しつつ時間は刻限へと
迫る。現在午後五時十五分。

ライフ・ダービー

アホ伝説

でんせつ

ライフ・ダービーのルール

- ・参加者はハンター、逃走者の二つに別れる。
- ・ゲームバランスを考慮して、ハンターと逃走者の比率は二対五とする（今回はハンター12人、逃走者31人）
- ・ハンターは、『善人』サイドから募集される。
- ・逃走者は、『悪人』サイドから募集される（ランダム、立候補、あるいは国民投票で指名されることもある）
- ・ハンター以外の『善人』は、観戦室からライフ・ダービーを観戦することも出来る。

ハンターにはナイフを支給。その他希望者にはピストル、マシンガン、ライフルから好きなものを与える。

ハンターは赤、逃走者は青のリボンをそれぞれ見えるように身に着ける。破った者は処刑。

逃走者を全滅させればハンターの勝ち。誰か一人でも生き残り、チェックポイントのスイッチを押せば逃走者の勝ち。

キルボーナスは一人につき一千万円。最多キルボーナスはプラス三千万円。

生き残った逃走者にはライフボーナス一千万。チェックポイント到達

者にはプラス五千万。

- ・フィールドの外に出た場合は失格。処刑。
- ・上記に抵触しなければ何をしても自由（ただし参加者以外への危害を加えることは禁ずる）

あさが

麻賀涼は息を切らしながら商店街を走っていた。ライフ・ダービーの開催地に選ばれたというだけあって、街から人の気配は殆ど消えていた。静寂の中を麻賀は駆け抜けていった。

『何故悪人がのさばらないといけないのか』

すべての発端は総理のこの一言だった。いじめ問題に言及した一言だったが、それがネットを通じて瞬く間に世間に流布され、多くの賛同を集めた。

麻賀の目にどこかの人権団体の貼ったポスターが映った。

『私たちの言葉は総理の言葉である！』

酷く間抜けだと麻賀は思った。

気をよくした総理は効率よく悪人を淘汰しようとするシステムを考えた。それがこのライフ・ダービーである。主に服役中の者、前科のある者、少年院に送られた者、多くの署名を集め悪人認定された者たちなどが、『悪人』となり、それ以外の『善人』が彼らを狩るという極めて悪趣味なゲームだった。

麻賀はバカな話だと思った。しかしあろうことかこの法案は国会を通

つてしまった。

ダダダダダダ！

「くっ！」

背後からマシシガンンの唸り声が響き渡る。麻賀にはその一つ一つが死の宣告に聞こえた。

麻賀は「悪人」だった。そしてそれを追うのは全く面識のない「善人」なのだ。

「くたばりやがれ！ この悪人が！」

さらに放たれるマシシガンに対し、反射的に麻賀はすぐ横のカシユアルシヨップのシヨウウインドウに転がるように飛び込んだ。

（死んでたまるか……！ こんなところで！）

ガラスで切ったのだらう。頬から垂れる血を拭いながら麻賀は隠れられそうな場所を探す。

「うわあ！」

声のした方を見ると店長らしき人物がいた。その横には店員の姿も見える。ライフ・ダービーの間隠れていたのか、麻賀を見て凍り付いている。しかし麻賀にとつては吉兆だ。

（一般人がいればハンターも汗鬨には動けない……）

迷わず麻賀はハンガーラックに掛けられた衣類の壁に身を隠した。

「おい君……」

ダダダダダダ！

布の壁越しに銃声が響き渡った。衣服が千切れ飛びマネキンが砕け、

埃と硝煙の臭いが店中に充満していく。

倒れたハンガーラックと衣類の中に身を隠しながら、麻賀は耳をそばたてた。

ガシヤン。

固い靴がガラスを踏み砕く音。間違ひなくハンターが店内に侵入してきた音だった。麻賀は身震いした。

「君！ 一体何をやるんだ！」

「ライフ・ダービーだ。損金は国に請求してくれ」

ハンターは店内に留まっている。入り口以外に逃げ場はないが、それはハンターのすぐ脇だった。

麻賀は服の山に出来たわずかな隙間から店内を覗いた。視界に入ったのはトイレと試着室。しかし、飛び出そうものなら間違ひなくハンターは追ってくるだらう。

（試着室はもちろん、トイレにも窓は無いかもしれない……飛び出せば当然気づかれる……しかしこのまま隠れていてもいずれば見つかる……どうする？）

そのとき、麻賀の手に固いものが触れた。それを拾い上げ、眺める。

瞬間、麻賀の脳裏に一つの妙案が閃いた。

「おい。どこだ。観念して出ておいでー」

ハンターの小馬鹿にしたような声が聞こえる。恐らくにやついているに違ひないと麻賀は思った。しかしそれは麻賀も同様だ。

（いいぜ、笑っている。その偽善の皮今すぐ剥いでやろ）

瞬間、麻賀は服の山から飛び出し、トイレに向って駆け出した。

「そこか！」

ハンターはマシンガンを連射するが、麻賀には当たらなかった。そもそも距離があれば素人の銃などまず当たらない。麻賀はなんなくトイレに逃げ込んだ。

（頼む。上手くいってくれよ……！）

「さあ殺してやるぜ！」

ハンターの間延びした声がトイレ中に響いた。

（ついに来たか……）

目を伏せながら麻賀は頭の中で状況を整理した。

トイレには窓があるが外に鉄格子が嵌められており脱出は不可能。小便器で用を足している帽子を被った男が一人と、鍵のかかった個室が一つ。それがハンターから見える今の状況。この状況なら、ハンターが行きつく先は……

「そこか！」

ハンターは唯一鍵のかかった個室に向ってマシンガンを放った。数秒の騒音。それで扉が蜂の巣になる。

「ははは。返事がないなく、死んじまったか？」

ハンターは穴から中を覗き込もうと身を乗り出す。

ドゴッ！

その瞬間、ハンターの背後に忍び寄った麻賀がモップでハンターの後頭部を思い切り殴った。

「ぐっ！」

倒れたハンターは麻賀の顔を見て驚愕していた。まるで自分が殺した男の亡霊にでも出会ったような顔。それも無理はないと麻賀は思った。まさかマシンガンで狙われている男がいつの間にか上着を脱ぎ帽子を被って呑気に用を足しているとは夢にも思わないだろう。

麻賀はさらにモップを振り下ろした。先端のクリーナーシートは外され、金具が露出している。

麻賀が拾ったもの。それは帽子だった。砕かれたマネキンが被っていたキャップ。さらに上着を脱いでシャツになれば印象はがらりと変わる。麻賀はトイレに飛び込んだ後、個室に入り鍵をしめ、上着を脱ぎ帽子を被った後、扉をよじ登って外に出たのだ。

顔見知りならすぐにはれていた。面識がないからこそ出来る不意打ち。麻賀はハンターのマシンガンを奪い、ありつたけの弾をハンターに撃ちつけた。やがてハンターはぐったりとして、そのまま動かなくなった。

「銃を振りかざす者の……正義を振りかざす者の驕りだ。お前らは、自分たちが狩る側であり、殺されるとは夢にも思ってただろう……多分そこが、お前らの隙だ」

麻賀はトイレを後にした。

禍夜葬

まがやそう

はじめす

みても、目につくのは九歳から上の子供ばかり。それより下の子供は赤子は、どこにも見当たらない。刻々と村が衰退していつていくことは、誰の目にも明らかであった。いずれは老人ばかりになって、やがてはその老人達も死に、絶滅してしまうという未来が安易に想像されていた。

「このまま子供が生まれなければ、村は破滅だ……」

他の者に聞かせるでもなく、一人の男が言った。声は拾われることなく、空気に溶け消えていく。

長老は深く息をついてから、さらに話を続ける。

「我々はその原因をつかむことができなかった。村に夫婦がいないわけではない。そればかりか、営みまでもしっかりと果たしている。それなのに、子が成されないのだ。……その事実については僕が言うまでもなく、お前達も大いにわかつていることであろう」

長老は八人の顔を、順に見回して言った。この場にいる者は、揃って妻を持つている。中には子供のある男もいる。むろん、九より上の子供であるのだが。村を蝕む瘴気については、彼ら自身よくよく身をもって熟知しているのであった。老人に顔を見つめられた者は、居心地悪そうに目をそらしていた。低い声が惣堂内に響いていく。

「否。絶対と言いつけることはできないが、原因はわかっている。わかっているのだ。断定はできなくとも、我々は確信しているのだ。村の女の誰もが、満足に子を産むことのできぬ病魔におかされるとはどうにも考えにくい。……いや、病魔といえは病魔か……。年月も一致している。我々を苦しめているのは、ヤタキチの呪いであろう」

村の惣堂に男達が集まっている。彼らは全部で九人いた。中央にある囲炉裏を取り囲む形で座っている。若い者もいれば、年配の者もいた。彼らの顔には一様に活気がなく、そればかりか陰鬱に彩られている。誰も他者と目を合わせようとせず、顔を下に向けたままただ押し黙っている。

それは久方ぶりの集会であった。久方ぶりの集会であるのに、幾ばくかの時間が無為に過ぎていく。時折足を組み替える音や頭をかく音、舌を打つ音が鳴る。

「早くも、八年が過ぎた」

入口から見て、一番奥に座っている男がついに口を開いた。彼は村の長老であった。その深い皺の刻み込まれた顔は、男達の中でも特にくたびれていた。

「この村から子供が姿を消して、もう八年になる。我々は八年もの間、ただ手をこまねいているだけであった」

老人の言葉に、誰もが頷いている。その言葉はまったくの事実で、近年の村においては、幼子の姿を見つけないことができなかった。外に出て

その場所は一瞬、時が止まったかのように静まり返った。誰もが沈黙してしまつたばかりか、微動だにしない。眼球さえも硬直している。

ヤタキチというのは、村において禁忌の名前であつた。村人達は、ヤタキチの摩訶不思議な魔術によって引き起された惨劇の夜を、いまだ忘れていない。恐ろしいヤタキチの姿を、忘れてはいない。忘れることは不可能なのである。ヤタキチの残虐によって、多くの村人が命を落とした。そのヤタキチが、死してなおも村を呪っているとすれば、これほど恐ろしいことが他にあらうか。

まことに忌々しいことであるが、村はヤタキチを祀つていた。その霊を鎮めるべく、立派な墓が建てられた。自身の家族を無慈悲に殺したヤタキチの為に、血の涙を流しながらも手を合わせる者がいた。生身の者へ違い、亡者は討つことができない。

だが、これらの目論見は功を奏さなかつた。いくらヤタキチの霊を祀つたところで、その壮絶な最期を悼んだところで、村に起こる問題は解消されなかつた。いつてしまえば、まつたくの無駄苦勞だつたのである。

この事實は、それまで以上に村人達の心へ暗い影を落としていった。今も禁忌の名前を聞いた為に、男達は血も凍りそうな思いをしているのである。

「ヤタキチの憎悪は、我らの想像している以上に強いのであらう。そうでなければ、これほどの呪縛となつて発生はしない。我らの子を、蝕みはしない」

老人は再び、男達の顔を見回していく。絶望である。深い絶望が、そ

こに漂っている。両手の平を見つめる者の目は、うつろであつた。手の中に生きること許されなかつた赤子を、抱いている風である。

長老は咳払いをする。わざとらしい咳払いの内に、しかしどこか力強い音を聞いた者は、一人二人ではなかつた。いつの間にかそのくたびれた顔にも、覇気が宿つていた。

「ところで諸君、リョウカン、という方について何か聞いたことはあるだらうか？」

男達は不可解そうな顔をしながら、お互いを見回した。そのような名前は、誰も聞いたことがなかつた。急に変わった話題に、置いてけぼりにされている節もあつた。

「まあ、お前達は知らぬかもしれんな。リョウカン様というのは、世界各地を渡り歩いている法師様だ。稀なる神通力を持つていると評判で、行く先々に怪異があるものなら、それを払つてきた。鬼のような物の怪の類が棲みつていれば、その絶大な力によって屠つてきた」

男達には、また長老の言わんとしていることがわからない。しかし誰も騒ぐような真似はせずに、一途な気色で長老の顔を見つめている。

「今朝のことだ。そのリョウカン様が、この村へお立ち寄りになつた」

物堂内に、いつせいにどよめきがわき起こる。先ほどまで暗い表情をしていたはずの者達の顔には、一瞬にして晴れ間が差し込んでいた。彼らがそんな様子になつてしまうのも、無理ないことである。そのような大層な法師様ならば、ヤタキチの霊を鎮めてくれるのではないか。村を包み込む呪縛を、払ってくれるのではないか。そのような期待が、彼ら

の胸に兆したのであった。

「リョウカン様は儂の話を快く聞いてくださった。今は、寺の本堂におられる。そこでヤタキチの霊の力の具合を、はかつておられるのだ」

「長老、はつきり言ってくれ」

長老から見て三つ右にいた男が口を開いた。男は喜びと焦燥の入り混じった、複雑な表情をしている。

「そのリョウカン様とやらは、俺達の村を救ってくれるのか？」

再び、どよめきが起こる。先ほどのものとは、調子が異なっていた。

男の心もとない声から伝染したみたいに、他の者達の顔にも暗い色が戻っていく。長老は自身の肌突き刺さる強い視線を、ひしひしと感じていた。白くなつた顎髭をなでながら、慎重に言葉を選んでいく。

「リョウカン様が我らの救世主となつてくれるか否か。それはまだ、リョウカン様にも知りえぬことだ。まして儂に、わかるはずもない」

長老はいったんそこで、大きく息を吐き出した。

「だが、リョウカン様の評判については、儂もかねてより耳にしたことがあった。こんな片田舎の老いぼれにまで届くほどだ。どのみち儂らにヤタキチを破る術はないのだから、今はリョウカン様を信じるしかなかろう」

奥歯に衣着せる長老の言い回しに、男達の半分は納得がいったようであり、もう半分は納得がいかなぬようであった。発言した当の男に至つては、先ほどよりも不安そうな色が顔面に滲み出ている。

「父上」

入口から声がした。男達はいっせいにそちらを向く。見ると、長老の息子がそこに立っていた。走ってきたらしく、ぜえぜえと荒い息を吐いている。

「父上。リョウカン様が、至急お話ししたいことがあるそうです。集雲の最中に申しわけありませんが、一度寺院の方に来てはくれませぬか」
「わかった。すぐ向かおう。お前達、すまないが本日はいったん解散とする」

長老はゆっくり立ち上がった。静かな足取りで歩いていき、草履を履いて外に出る。息子と言葉を交わしながら、寺のある方角へと向かつていった。

残された男達は戸の隙間から、二つの背中を見えなくなるまで眺めていた。

二

昼の間、スエは狭い家の中でひとりぼっちになる。唯一の家族であり、友達であるところの父親は外へ仕事に出る。スエは家の外に出ることを認められていなかったの、日中は一人で過すのであった。

これといってやることもない。そんな時にスエは床へ仰向けに寝転がって、天井の木目を見ながらぼんやり空想するのが常であった。父親から聞かされている、スエしか知らない外の世界についてである。

スエが外の世界に深い憧憬を描いているかという点、それは否である。父親から外を恐ろしい場所であると言いつけられているスエは、無邪気にそれを信じている。それ故スエは、外に出てみたいと願ったことはこれまで一度もない。

しかし、気になることはあつた。父の話聞いた限り、外の世界には自然というものがある。むろん、家にいるからといって自然の一部分を目撃できないわけではなかつた。父が持つてくる野菜や果物といった植物、それに鳥や兎などは、スエも目にする機会がある。だが、それらは父親の手を介して運ばれてくるのであつた。自然が自然の中に溶け込んでいた様子、スエは見たことがない。よつて父親の話と自身の想像でもつて空想することが、スエにはささやかな楽しみとなつたのである。それぐらいいいか、楽しめることがなかつたのである。

だが、スエがそんな風に純真に楽しめるのも、自然を自分とは縁のないものであると割りきつていたからであろう。もしもなまじ自然への憧憬を抱いていたのなら、スエは外に出られぬことの辛さによつて精神を病んでいたかもしれない。外的な要因をもつてして籠の中にいるというのは、夢見がちな少女にとつて幸運なことであつたといえよう。

スエはそのような美しい想像をするだけでなく、時として恐ろしい世界について描いてみることもあつた。すなわち、鬼の宴の世界である。鬼という生きものこそスエははっきり目撃したことがなかつたが、父親の真に迫つた話によつて、自然物以上に鮮明に思い浮かべることができていた。

鬼は人間である父親よりも、二回り三回りも大きな体型をしているという。牙という鋭い歯を持ち、額には細くつがった角を生やしているという。そして何より、太い腕で子供を殺したのちに食べるといふ話である。スエは鬼に絞め殺され、その後には頭からばりばり食べられている自分を想像すると、寒くもないのに身震いしてしまうことがあつた。父親は村内を走り回る子供の影が消えたと言つていたが、それはひとえに鬼が村へやつて来たせいとのことであつた。

父親はこれまでに何度も、スエに鬼の話をしている。スエはその度に、熱心に父親の声へ耳を傾けている。おおよそ、それは次のような内容であつた。

十年ほど前に、親子の暮らす村に鬼の一団がやつて来た。鬼の数は村人に比べてずつと少なかつたが、一人一人の力が強大な為、まるで太刀打ちできなかった。村が鬼に支配されてしまうのに、長い時間が必要なかつたのである。村人達も己の命は惜しいから、鬼に平伏して暮らすことを心辛くも受け入れてきた。

鬼は食べられるものなんでも食べるのだが、中でも人間の肉を好んだ。人肉は鬼にとつて、格別の馳走なのである。といつても奴らは、成熟した肉にはさほど興味を示さない。鬼が好物とするのは、人間の子供の肉……とりわけ産まれて間もない赤子の肉だったのである。鬼曰く、肉が柔らかく上等らしい。鬼達は村中の子供と赤子を捕まえ、食糧にしてしまつた。だが、子供が消えてもなお、鬼達は村から出ていかなかつた。村のすぐ近くに居座り、無力な大人達へ殺してしまわない代わりに、

これからも子を作りそれを差し出せと命じたのである。贅を捧げている間は、鬼は村の西にある洞窟の中で暮らし、おとなしくしているのだという。

自分らの住居からそれほど離れていない所に鬼の集団が棲んでいるかと思うと、スエは恐ろしく、何人もの子供達が打ち殺され食べられていくと聞いては、怒りの炎が揺らめくようでもあった。

「——本当はな、スエ」

話の終わりに、父親は決まってこのような内容を喋った。

「父ちゃんは、村の掟を破つちまつてるんだ。息子なり娘なりが生まれたら、そのことを村の長に報告しなければいけねえ。でもなスエ、父ちゃんにはそれができねえ。かわいいお前のことを、鬼畜生に差し出すなんて父ちゃんにはできねえ。俺はな、自分の子供を平気で殺しちゃうような冷血どもとは違うんだ。あいつらは心を持たない、人殺しだ。俺は違う。だからこうして、お前のことを隠して生きてる。父ちゃんは、村中を裏切つちまつてるんだ。スエ、お前にはすまねえと思つてる。時代が違えば、お前も家の外に出ることができたはずなのになあ」

父親の声はだんだんと涙声になり、しまいにはぼろぼろ泣き出すのである。するとスエも、そんな父親があわれに思えてきて、父親の指を小さな口に押し込んで同じように涙の粒をこぼすのであった。

スエは今年で七歳になる。父親の言に従って、家の外に出たことは一度もない。



夕間暮れよりやや早く、父親は手ぬぐいで汗を拭き拭き帰ってくる。

父親の肌は浅黒く、日の光を浴びないスエの白い肌とは、まるで正反対であった。

「スエ、いい子にしてたか？」

家に帰ってくるなり、父親は決まってそう尋ねる。

「ああ、いい子にしてた」

「父ちゃんのいない間、何もおかしなことはなかったか？」

「ああ、何もなかった」

これが父娘の間で、第一に交わされる会話であった。それを聞くと父親は、安心したように顔をゆるめるのである。おかしなことというのはもちろん、スエの存在が他の者に知られてしまうような事態を指している。それはスエにとっても父親にとっても、何より注意せねばならないことであった。

確認がすむと、父親は食事の準備へと取りかかる。二人は朝夕に食事をとっていた。スエは隅の方でうつ伏せになって、支度の様子をじーっと眺めている。父親がいる間、スエは空想の遊びを必要としなかった。父親を眺めているだけで、十分に楽しかったのである。

食事は稗と粟の雑炊が大抵で、たまにそれに、糠味噌に漬けられた山菜や野草が添えられた。父親は箸で碗の中の雑炊をすくうと、左手の中

に乗せる。まずは自分がそれを食べる。もう一度雑炊を手の平に乗せると、今度はスエの前に差し出す。スエは顔を近づけて、鳥が餌をつつくように父親の手に盛られた雑炊をすすする。

「どうだ、うまいか？」と父親が聞くと、いつもスエは笑顔で「ああ、うめえ」と答えた。父親の作るものはなんでもうまかった。野良仕事に精を出してきた父親はたくさん食べたが、たださえ身体が年頃の娘よりも小さく、家の中にこもりっきりのスエは五口六口も食べれば腹が膨れた。

食事ののち、父親は水浴びもできないスエの身体を、濡らした手ぬぐいで隅々まで拭いてやることがあった。スエはそれがむずがゆくも心地よく、猫のような甘えた声を出してしまふ。

それも終わる頃には、すっかり日が沈んでいる。二人はやることもないから、さっさと床につくのであった。父と娘は寄り添って眠る。父親はスエが寝つくまで、子守歌代わりの話をしてやった。村の出来事であったりお伽噺であったり怪談であったりと、種類に富んでいた。スエは父親が不憫な自分の身を想い、色々な話を集めていることを悟っていたので、うつすら目蓋を閉じながら、その声へ真剣に耳を傾けた。父親の語りはうまく、そうしているとたちまちスエは、眠りの奥へと誘われていった。

へび かんげん
蛇の甘言

ゆず

あれはたしか、小学四年生の時だったと思つた。

物心つく前に離婚し、僕を引き取つた母親が新しい男性と再婚した。その男性の連れ子の、これから妹になるという一つ年下の女の子に初めて出会つた時のことを、僕は今でも忘れられない。

僕と視線が合い、笑みを形作る唇とともに細められた、両の瞳。

はつきりと整つた顔立ちよりも、笑顔の後に続いた挨拶の細くてきれいな声よりも、獲物を見つけた喜びに瞳孔を狭め、舌をちろちろと揺らす蛇の狡猾さを感じたその瞳が、その時生まれた胸の奥の凝りとともに、何よりも深く脳裏に焼き付いて離れなかつた。

十月も終わりを迎え、すっかり気温が落ちた校庭の中で、同学年らしい男子がサッカーをしていた。

二階の教室の窓際、前から四列目のここからは、走り回る彼らの姿がよく見えた。

高校二年生ともなれば、秋冬の外での体育授業などやりたくない、ましてやそれが六時間目ともなればなおさらだというのが男女共通の認識だと思つていたが、積極的に動いている頭数を見るに、どうやらそうで

もないらしい。いや、案外、もう内申点のことを気にして、授業に熱心に取り組んでいるというアピールをしているのかもしれない。

そう考えると、ちよこまかと走り回る彼らが、野を元気に駆け回る一方で、あくどい企みをしているずる賢い狐の群れに見えてきて、思わずくすりと笑つてしまった。

そんなことを授業中に考えていると、教師が僕の名前を呼んだ。

教壇を見ると、英語の教諭でありこのクラスの担任でもある大鷲という名前の先生が、少しだけ不安げにこちらを見ていた。聞き間違いではなさそうだった。

立ち上がつて、適当に当てられたと思われる箇所の英文を、ぎりぎり教壇に聞こえるくらいの声量でボソボソと読む。それでも読み終わって着席すると、周囲からため息のようなものはいくつか聞こえてきた。普通の人よりも声が低いのは自覚しているのだから、放つておいてほしいと思つた。

先生の、名前の通り鷲のような顔に安堵が浮かんだのから目を逸らし、そんなことよりも、と気を取り直す。これから放課後、どこに足を伸ばすかのほうが重要だ。

生まれた胸の奥の凝りは、まだ体の内で燻っていた。

なるべく遠くがいい。今日は、通学に使っている路線の、終点の三つ前の駅を選んで降りた。

最初は手近なところでやろうと思っていたのだが、万が一の時に備えて、なるべく離れたところでやろうと考えなおした。

すでに熱を持ち始めている胸の奥を抑えつつ、降りた駅から住宅街に向かつて歩き始める。同時に、周囲に視線を巡らせて適切な場所と相手があるかを確認する。

幸いすぐに見つかった。道端を歩いていた猫を、近くにあった公園の死角に誘導してくる。僕にはどうやら、そういうことに関しての才能があるようだった。そしてそれは、僕にとつてとても都合がよかつた。

胸の奥の凝りがはちきれそうになると、時折こうして猫を使つて衝動を慰めていた。

今度で最後にしよう。毎回のようにそう思い、そして毎回繰り返している。

今度こそ、今度で最後にしよう。

そう思いながら、気付かれないようにそつと後ろから、猫にナイフを押し当てた。

あとがき

植崎優士

お読み頂きありがとうございます。恒例の合宿で発表した犯人あてが原作で、改稿の後に応募した新人賞にて最終候補になるとは思いもませんでした。サラリーマンの道しか考えていなかった平凡な男子学生に、作家の道を少しでも夢見させてしまう新人賞はなんとも罪深い……とは言っても、現状では作家を目指す器で無いことを、読後の皆様にはおわかり頂けましょう。好きなミステリを好きなように書ける場が今後も欲しいと思う次第です。

果野

私にもつと力があれば、To LOVE るなおねーさんを書けたのになあと思います。年上の女性に翻弄されたい！

観覧車

この度は本誌『別冊最先端』を手にとって頂いてありがとうございます。どうぞいます。同じ専修大学探偵小説研究会の会員たちが集まり製作した本誌ですが、OBの先輩以外全員が就活生という不安な幕開けでした。ですがこうして多色な作品が集まり、今日この日を迎えられたことを嬉しく思います。「死を穿つ愛」

は小説の形式ではありませんが、刑事ドラマを意識しています。本作を読んで刑事ドラマの魅力が少しでも伝われば幸いです。

しめす

はじめまして、お読みいただきありがとうございます！

私は探偵小説研究会の会員ですが、どちらかというとミステリ小説よりもホラー小説やサスペンス小説が好きで、普段もそういったものを好んで読んでいます。

今回の作品も、自分の趣味が強くにじみ出た内容となりました。

現実の世界とは大きく異なる『村』という舞台の魅力に、とり憑かれています。

アホ伝説

この度は、本書を手にとっただき、ありがとうございます。アホ伝説と申します。専修大学探偵小説研究会OBとして、このように一つの冊子としてサークルの活動が身を結んだことを嬉しく思うとともに、手に取っていただいた皆様には言葉では表しきれない感謝でいっぱいです。私も今回『ライフ・ダービー』を寄稿させていただいておりますが、メインは後輩たちの作品ですので、是非そちらをお読みください。本当にありがとうございます。

ゆず

どうも、「君の名は。」をもう一度見たいと発言する bot と化したゆずです。

今回の「蛇の甘言」は、二年前に書いた小説を若干リメイクしたのですが、いかがでしたでしょうか。

何度も読み返すことで新しい発見のある味わい深い小説を書きたいというのが目標なので、そうなっていると嬉しいのですが。

まだまだ不足を感じるので、よりよいものが書けるように精進したいと思っております。

編集後記

編集を担当しました、植崎です。

読者の皆様、本誌を手にとって頂きましてありがとうございます。いました。文字の大きさが懸念されるところではありますが、こうして原稿が揃ってサークルとして出店できたこと——皆様に読んで頂ける機会を作れたことに、一定の成果が得られたように思います。

編集をして、いかに会員たちの趣味が多様であるか思いました。誰一人として似通らない、バラエティ豊かな作品集となったことを嬉しく思います。読者の皆様にあつては、どの作品がお気に召しましたでしょうか？

あとがきにもある通り、OB一名を除いて全員が現役の学生、かつ卒業を控えた四年生でもあります。各自、卒業論文ならぬ卒業制作のような気概を持って執筆していたと思います。

それ故に、来年度以降は各著者が当サークル名義で執筆するかわかりません。それどころか出店するかも未定であります。そう思えば尚のこと、こうして読者の皆様に読んで頂けたこと——一期一会となるかもしれない出会いに、感謝の念は尽きません。

またどこかで会員の名前を見かけることがございましたら、そのときは何卒よろしく願います。